

IV-39

感覚統合理論による雫石川盛岡駅西口の地区デザインの検討

岩手大学 正 員 安藤 昭
 岩手大学 学生員○保田理恵子
 岩手大学 正 員 赤谷 隆一
 岩手大学 正 員 南 正昭

1. はじめに

盛岡市は、現都心部への一点集中型の都市構造から生じる交通渋滞や業務用地不足などの問題解決のため、現都心地区と軸状都心を形成する拠点として盛岡駅西口地区と盛岡南地区の開発が進められている。このうち現都心地区と盛岡南地区の中心に位置する盛岡駅西口地区は、地区の特性を活かした開発が進められているが、多目的広場などに土地利用が決定している一帯は具体的なデザインがなされていない。また、この一帯はほとんど整備がされていない自然豊かな雫石川河川敷が隣接している。この地区は、1992年に盛岡市内の河川および沿川地区を対象にしたデザインコンペ「盛岡・水辺のデザイン大賞」において、対象箇所の1つとされた。その後、河川敷利用に関する計画は立てられているが、こちらも具体的な整備デザインはまだ決定していない。

本研究では、「盛岡・水辺のデザイン大賞」で雫石川盛岡駅西口地区をデザインし優秀賞を受賞した2作品を対象に、現在の開発地区の状況を考慮しながら感覚統合理論を踏まえた基本的視点を用いて評価し、さらに建物と遊歩道と河川が空間的に調和した独自のデザインを提案することを目的とする。

2. 対象地区の概要

(1) 盛岡駅西口地区開発とデザインの対象範囲

盛岡駅西口地区は新幹線や高速道路とのアクセス性に優れ、旧国鉄盛岡工場等の大規模閑地を活用し新たな産業振興を図り、高度な都市機能をもつ商業業務地として開発している地区である。図-1に盛岡駅西口地区開発における土地利用計画図、図-2に施行状況を示す。本研究におけるデザイン対象範囲は図内の太田橋中川線より雫石川側の一帯とそれに隣接する雫石川河川敷である。

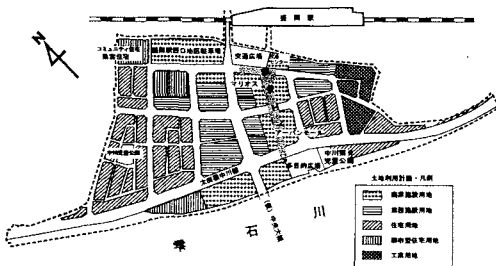


図-1 盛岡駅西口開発における土地利用計画

(2) 風土イメージ

この地区は、いわてレッドデータブック記載種の生息生育、生物の生息環境として適しているヨシ群落などの植物群落の存在、多様な鳥類の生息環境化にあること、サケの自然産卵場所などといった特徴のある自然豊かな場所であることが言える。自然景観資源として、北に岩手山、南に南昌山、東に蝶ヶ森が眺望できる。太田橋を取り巻く自然環境は、江戸時代の盛岡八景に「沢田の夕照」「太田の落雁」と詠まれている。歴史景観資源としては煉瓦造りだった旧盛岡工場（明治26年設置、昭和60年閉鎖）が挙げられる。

(3) 土地利用の変遷

この地区は明治時代には旧盛岡藩士によって桑畑として利用され始めたが、護岸堤防が未整備だったため、頻繁に氾濫を繰り返す雫石川による水害を受け桑畑は次第に荒廃し、その後は利用できるところのみを耕地としてきた。堤防は、昭和7年に雫石川改良工事により造られた。明治23年盛岡駅が開業し、その3年後には国鉄盛岡工場が設置された。昭和60年に工場が閉鎖されるまでこの工場を含む工業地域がこの地区の広範囲を占めていた。昭和8年と昭和23年以降の航空写真によると、道路などの骨格的变化や土地利用の目立つ変化は見られなかった。この要因として、旧盛岡藩士桑田の存在や国鉄盛岡工場があり大部分が工業地域であったため、新しく都市機能が設置されなかったことが考えられる。高度な都市機能を持つ商業業務地としての現在の開発は、この地区にとって非常に大きな変化となる。この開発を機に既存都心地区と新都心地区を結ぶ要という新たな役割を担うことになったこの地区は、高度な土地利用と施設が今後も求められることになる。

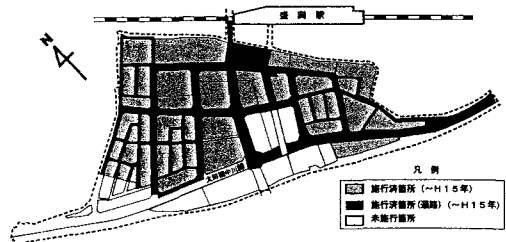


図-2 盛岡駅西口開発の施行状況

3. 既存デザインの評価

「盛岡・水辺のデザイン大賞」の優秀賞受賞2作品、『雫石川ふれあいピオトープ—四季と自然にふれあうやすらぎの水辺—』(図-3)と『都市と自然の共存の為に・・・』(図-4)について、盛岡駅西口の現在の整備状況を考慮しながら評価を行う。

(1) 基本的視点

評価を行う上での基本的視点を感覚統合理論を踏まえた①人と自然との共生、②社会基盤システムの構築、③豊かな地域社会の形成、④芸術文化の創造、⑤地球環境の保全と創造、の5つとする。

(2) 評価

a) 『雫石川ふれあいピオトープ』

—四季と自然にふれあうやすらぎの水辺—

この案は、緑ふれあいゾーン、四季ふれあいゾーン、生きもののふれあいゾーン、水ふれあいゾーンの四つにゾーニングされており、水辺の様々な自然要素を保存しつつ活かしている。これは基本的視点①から見て、雫石川の自然環境の持つやすらぎ感を重視した点が評価できる。しかし基本的視点③においては、アーバンモールなどの商業施設で買い物を楽しんだ人の足が河川敷まで伸び、賑わいのある豊かな人間関係が形成される場となることが望ましく、その点で芝が広がる四季ふれあいゾーンは、導入部としては魅力が足りない。視覚的にも機能的にも人を惹きつける個性が必要である。

b) 『都市と自然の共存の為に・・・』

この案の特徴は、太田橋中川線まで現在の堤防の高さまで盛土し、スーパー堤防にすることで、都市街区と河川空間が一体的にデザインされていることである。スーパー堤防とする案は実際に採用され、盛土が始まっている。基本的視点①においては、a)のデザインと比べ整備されている部分が目立つ。基本的視点④から見て、ステージのあるイベント広場は芸術活動の新しい拠点となる可能性が考えられる。また、2つの堰による流れ落ちる水の演出は、音景観などを創出した点で評価できるが、堰を設けることで河川環境を大きく変えることになり、実現の可能性は低い。(仮)中央大橋は斜張橋としてデザインされているが、桁橋に決定し建設中である。

2つのデザインに共通して、遊歩道に桜並木が設置されている。現在、盛岡市側でも桜並木の設置は考えられている。しかし、風土イメージや駅側の都市景観、高水敷からの岩手山の眺望を考慮すると、桜並木の設置は検討する必要がある。

4. 独自のデザイン案の作成

既存デザインを踏まえ、よりよい独自のデザインの作成を行う。コンセプトを『市民の心を育むリバーフロント』、デザインキーワードを『繋ぎ』とし、以下の5つを考慮したデザインとする。

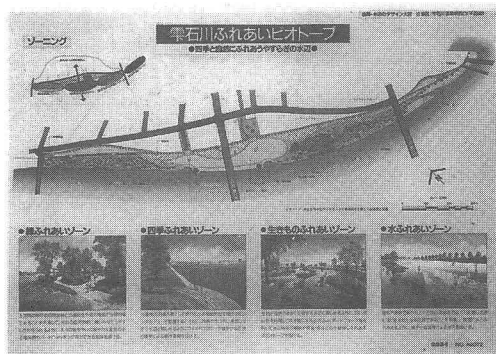


図-3 雫石川ふれあいピオトープ

(和田紘二他8名：株式会社ソリエントラルコンサルタンツ)

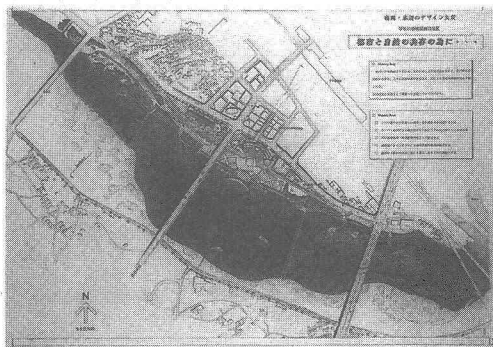


図-4 都市と自然の共存の為に・・・

(戸村道子他5名：岩手大学都市工学研究室・

株式会社中居敬一都市建築設計)

- I 人と自然を繋ぐ(人と自然との共生)
- II 交通ネットワークをダイナミックに繋ぐ(社会基盤システムの構築)
- III 人と人を繋ぎ、強いコミュニティを形成する(豊かな地域社会の形成)
- IV 雫石川と沿川の遊歩道と中央広場と建築物を空間的に繋ぐ(芸術文化の創造)
- V 持続可能な環境をデザインし、未来へと繋ぐ(地球環境の保全と創造)

今後は詳細な内容を決定し、岩手山などの山の眺望も意識した河川と沿川の遊歩道と中央広場と建築物が機能的で美しくデザインされた平面図とパースを作成していく。上記のIIでは、盛岡市の都市構造が軸状となることからLRTの導入などの交通面の検討を行なっていく予定である。

参考・引用文献

- 1) 盛岡市都市整備部都市計画課：盛岡の都市計画2003，2003
- 2) 建設省東北地方建設局岩手工事事務所：盛岡・水辺のデザイン大賞，1992
- 3) 安藤昭，赤谷隆一：感覚統合理論による都市景観設計の体系化，土木学会論文集No.653/-48 pp.63-75,2000
- 4) 盛岡市：雫石川太田橋下流河川敷利用基本計画，1999
- 5) 吉田義照：目で見える盛岡今と昔 郷土資料写真集第14集，盛岡公民館，1972